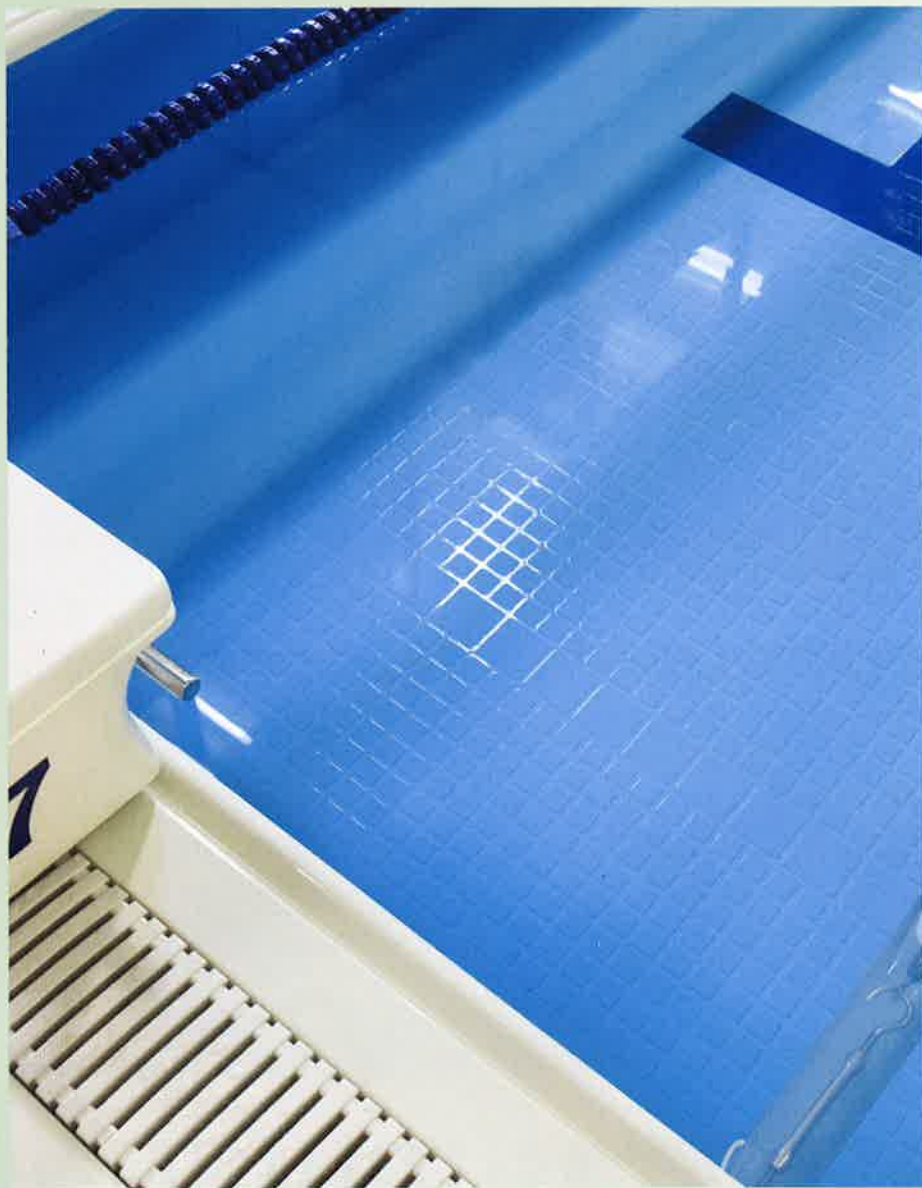


お  
わ  
り  
に

# 素足から伝わる技術 そして見えてくるプールの二面

— 新しいFRPプールの新たな可能性が見えてきた —



今から30年前というと西暦1980年、昭和55年である。建築物の寿命や、素材の耐久性、設計思想、施設企画といったものも当然、その時代に考えられたものだ。それが良いものかどうかではなく、重要なことはそれから30年という歳月で変化した、成長し、生まれたモノがあるということだろう。ヤマハ発動機「プール事業」にとっての30年。幼児用プールから始まり、学校用プール、室内温水プール、公認プール、ウォーターパークを経て、今世紀では世界水泳福岡での国際公認特設プールを皮切りに、予防医療やリハビリ医療用、健康増進施設などのニーズに応えるための研究・開発が繰り返されてきた。

新開発床「アクウォーク」の誕生は、プールのリデザインカンパニーとして社会とプールの関係を見つめ続けてきたヤマハからの提案といえるかもしれない。

これからさらに多くの人に愛されるプールを目指す。これからもっとプールが必要な社会になる。そのためにもっとだれもが気軽に楽しく入ることができるプールを創造していく。

「素足で入った方が足の指まで使って歩ける」。今回、納入されたばかりの協栄スイミングクラブ町田で、ほとんどの会員がそれまで使っていたアクアシューズを履かずに入水するようになった。伺った。

新しいアイデアが、今まで気づかなかった新しい効果を生む。

プールには、そして人にはまだまだいろいろな可能性がある。見た目にも、あるいはアイデアとしても一見素朴に思えるそのアイデアが、これからのプールにどのような影響を与えるか。

泳げない人にもその効果はプールに入るだけで実感できるのだ。この後の30年後にあたる2040年。プールはどのように社会と共生しているのか。進化はとまらない。